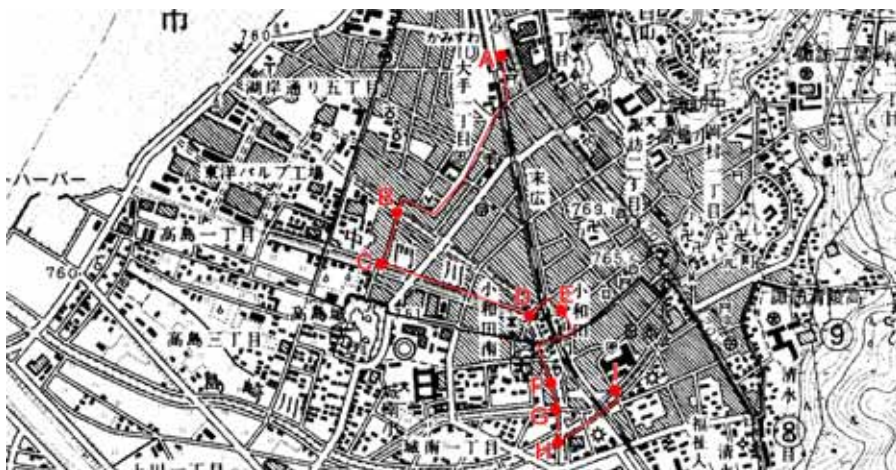


川に見る地域の特徴 - 諏訪市街地を例として -

牛山 素行

地域の特徴を 見るポイント

何の特徴もない地域というものはありません。どのような地域も、それぞれ固有な自然環境条件が背景にあり、その条件下で、それぞれ固有な人間活動の歴史を刻んでおり、注意してみれば、必ずそれぞれの地域の特徴が見えてくることでしょう。地域の将来計画、環境、防災などを考える際、地域の特徴を知ることは欠かせない作業です。地域の特徴の見つけ方の基本は、「自分の常識と違う、変わった光景をみつける」ということです。ここでは、諏訪市中心部の川の姿に着目して、「変わった光景」を探してみましょ。



諏訪市街の地形図 1:25000 地形図「諏訪」「南大塩」より

近接する二つ の川

JR 上諏訪駅から少し南へ歩き最初の踏切を渡ると、両側にケヤキの大木が並ぶ通りに出ます。地元では並木通りと呼ばれており、高島城築城当時から上諏訪の集落と城を結ぶ公道でした。この道を高島城方面に 500m ほど行くと幅 5 m くらいの川(衣の渡川、えのどがわ、図中 B)を渡ります。更に 100m ほど行くと、また同じような川(中門川、なかもんがわ、図中 C)を渡ります。常識的に考えられる川の姿は、山間部のいくつかの小さな流れが次第に一つの川に合流して行き、平地に達して大きな川や、湖、海などに注いでいくというものでしょう。そう考えると、側溝のようなものならともかく、地図にもはっきり記載されるような規模の川が、平地にこんなに近接して 2 本流れているというのは少し不思議なことです。また、C 地点付近の道路や家屋の高さをよく観察してみると、道路付近が周囲よりやや高くなっていることもわかります。

この少し不思議な 2 つの川をもっとよく観察するため、上流側に向かって歩いてみましょう。中門川に沿って 500m ほど歩くと 2 つの川はさらに接近し、中門川の橋のすぐ先に衣の渡川の橋が見えるような場所(図中 D)があります。更に 100m ほど行くと、川幅が少し広がったところがあり(通称「三ツ又」、図中 F)、ここで 2 つの川は 1 つになってしまいます。常識的な川の姿と逆になっているのです。F 地点から 50m ほど行くと、右手に帯状の緑地が見えます(G 地点)。しかし、ただの緑地ではなく、この部分は周囲より窪んでおりほとんど流れのない川のようにも見えます。G 地点から 50m ほど行くと、幅 10m ほどの川(H 地点、上流側が角間川、下流側が島崎川)を渡りますが、この地点でなんと中門川はこの川と平面交差しています。これらの不思議な光景を生み出した理由はいくつかあります。

不思議な川の 背景

戦国時代頃までの諏訪湖の水位は現在より数 m ほど高かったそうです。江戸時代に入り、諏訪湖の流出口である現在の釜口水門付近の拡幅が何度かに渡って行われ、諏訪湖の水位は下がり、諏訪湖の南東部が陸地となりましたが、八ヶ岳方面から諏訪湖に流入する現在の上川、宮川などはたびたび氾濫し、その位置を変えることがしばしばあったようです。このため、河川の氾濫による被害を軽減させるため、新たな排水路の開削や、河道の移動などがたびたび行われました。衣の渡川、中門川、角間川、旧島崎川などはこうした過程で現在の位置を流れるようになったようです。もともと湖中にあった高島城の周囲が陸地化するに伴い、これらの川は城の堀の役目も持っていたようです。また、三ツ又のある小和田地区は、江戸時代に花岡村、小坂村(いずれも現岡谷市)とともに諏訪湖での漁を認められていた村であり、船の利用が盛んでした。図中 E 地点には、現在は公民館や温泉の共同浴場がありますが、ここは川から引き込まれる形の船着場でした。明治から大正中頃には、上諏訪地区から諏訪湖を介して米を輸送する舟運の拠点としても利用されており、これらの川は一種の運河としても整備されたと言っているかもしれません。



F 地点 流れの向きは手前から奥へ



G 地点 中央の帯状緑地部が低くなっている



H 地点 左右が角間川，奥と手前が中門川



1983 年 9 月 29 日の諏訪市街の浸水状況

1983 年の豪雨
災害

G 地点の帯状緑地は、旧島崎川の跡です。現在の島崎川は改修され、角間川と島崎川が 1 本の連続した河川になっていますが(H 地点)、かつては角間川が F 地点に流れ込み、G 地点で島崎川が分岐する形態でした。I 地点の帯状の空き地がこの頃の角間川の跡です。このような複雑な形態であったため、豪雨時にこの付近および上流側は災害が起こりやすく、特に 1983 年

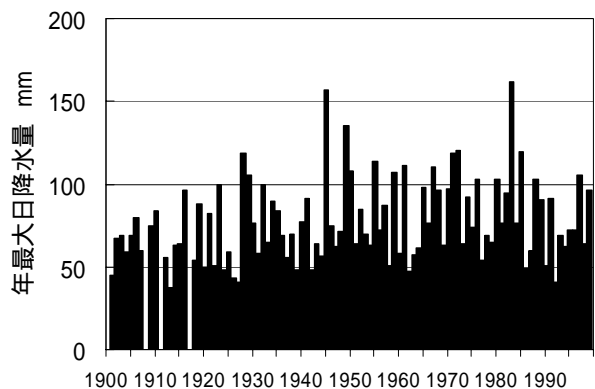
9 月の台風 10 号による豪雨災害時に角間川・島崎川付近一帯が大きな被害を受けたことから改修が行われ、現在の姿になったのです。

この豪雨災害の際には、諏訪湖が氾濫し、中央本線と県道岡谷・茅野線間の平坦部のほとんどが浸水しましたが、高島城周辺と、上諏訪駅付近から高島城に向かう道の周辺(図中 B~C)は浸水を免れました。これは、この付近が江戸時代に諏訪湖の水位が下がるより前からの陸地であり、先に観察したように、周囲より若干標高が高かったためです。

諏訪周辺の日降水量最大記録

地点	統計開始年	最大記録 mm	年降水量平年値
諏訪	1901	161.5	1307.0
松本	1898	155.9	1018.5
軽井沢	1925	318.8	1197.6
飯田	1898	325.3	1606.7
甲府	1895	244.5	1109.7
高山	1899	266.1	1733.5

諏訪測候所(諏訪市湖岸通り)における 1983 年 9 月 28 日の降水量は 161.5mm、降り始めの 27 日からの 2 日降水量は 215.5mm でした。9 月 28 日の降水量は、諏訪市街付近における 1901 年以降の日降水量としては最大の記録です。しかし、日降水量 161mm という値は、日本の豪雨記録としてはごく小さな値であり、本州中部の他地域と比較しても大きな値ではありません。また、1901 年以降の記録を見てわかる



1900 1910 1920 1930 1940 1950 1960 1970 1980 1990

1901 年以降の諏訪の年最大日降水量

1901 ~ 1935 年の観測所位置は現在の諏訪市仲町付近、1936 ~ 1950 年は同島崎付近、1951 年以降は湖岸通り

ように、諏訪ではこの 100 年間突出した豪雨が記録されていません。また、1983 年以降、諏訪地方は大きな豪雨災害に見舞われていません。それは 1983 年の豪雨災害以降の防災対策の効果によるものもあるでしょうが、この間強い豪雨に見舞われていないためでもあります。更に、1983 年の豪雨も極端に強い豪雨であったわけではありませんから、今後この事例を大きく上回るような豪雨が発生する可能性はあると考えておいた方がよいでしょう。

地域の特徴を
知る意味

ここで紹介したような見方で地域の特徴を知ることが、なにも知的好奇心を満足させることが目的ではありません。その地域の将来を考えるための重要な情報収集の一つなのです。この地域の場合であれば、複雑に入り組んだ川の姿が特徴的だということがわかれば、それをよそとは違う観光名所としてアピールすることができるかもしれません。1983年の浸水状況からは、日頃意識しないような高低差が、浸水災害時に明暗を分けたことが示唆されました。また、島崎川の河道の変更状況からは、地域の姿を大きく変えるような災害が、わずか十数年前にこの地域で発生していたことを知ることができました。これらの知識は、この地域で豪雨に見舞われた際にどのような行動をとるべきかを考える上での重要な情報になるでしょう。

古くからなじみの地域にも新たな発見はあり得ますし、移り住んだ土地であれば多くの発見ができるかもしれません。「自分の常識と違う光景」から、地域の特徴探しをしてみてください。

この文書は、「信州地理研究会編(共著), 2002:長野県の自然と暮らし, 信濃毎日新聞社」に収録された, 著者の原稿を元に, 書式を多少変更したものである.

牛山 素行 (2006年現在の所属:岩手県立大学総合政策学部)
<http://www.disaster-i.net/> メール ushiyama@disaster-i.net